



現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法—コーパス研究の日本語教育への応用—

李, 楓

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6560号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006560>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 李楓

専攻 グローバル文化

指導教員氏名 石川慎一郎

論文題目 (外国語の場合は必ず日本語訳を併記すること)

現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法 ―コーパス研究の日本語教育への応用―

論文要旨

本論文では、多様な日本語語彙のうち、漢語名詞と「する」が結合してできた漢語サ変動詞に焦点を当てて分析を行う。漢語サ変動詞は、異なる語種が結合して新しい語種が形成されたという点で言語学的に興味深いものであるとともに、日本語教育の観点においても重要性が高い。漢語サ変動詞について長い研究の歴史があるが、従来の研究は新しい理論の構築や既存の理論に基づく分析が主となっており、実際の言語データをふまえた漢語サ変動詞の細かい用法の記述は未だ必ずしも十分とは言えない。また、日本語教育の分野でも、全般的な研究はきわめて活発になされているが、とくに中国人日本語学習者に対象を絞り、漢語サ変動詞の学習上の問題点や改善法を明確に示した研究はきわめて限られている。

よって、本研究では、漢語サ変動詞の用法記述の精緻化を目指し、従来の研究ではほとんど扱われていない漢語サ変動詞の典型性、活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性の5点を取り上げ、コーパスに基づいて調査を行う。加えて、アンケートや教育実験の手法により、中国人日本語学習者が抱える漢語サ変動詞の理解や運用上の問題点を解明し、あわせて当該学習者に対する学習法の開発を試みる。

論文は序章、本論、終章からなる。序章では、本論文の立場を明らかにし、漢語サ変動詞を研究する意義と重要性を述べた後、全体の構成について紹介する。

つづく本論は、第I部「研究の枠組み」、第II部「漢語サ変動詞の諸相」、第III部「日本語教育における漢語サ変動詞」の3部に分けられる。

第I部には、2章「先行研究」と3章「リサーチデザイン」が含まれる。

2章では、本研究が対象とする漢語サ変動詞について、国語学および日本語学における研究の系譜を概観する。その後、本研究が立脚するコーパス言語学、及びコーパス日本語学に焦点を当て、その来歴、現状と今後について概観を行う。その際、どのようなコーパスが構築されているか詳細に紹介する。

3章では、本論文全体に関わるリサーチデザインと研究方法について述べる。研究の全体の目的、使用するデータ、本研究で分析対象とする漢語サ変動詞のタイプ、また、コーパスから得られた計量データの分析に使用する統計手法などについて概説を行う。

第II部には、4章「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」、5章「漢語サ変動詞の活

用上の選好性」、6章「漢語サ変動詞の内部構成性」、7章「漢語サ変動詞の自他性」、及び8章「漢語サ変動詞の語彙的排他性」が含まれる。

4章では、大規模な日本語コーパスを用い、様々なジャンルから得られた頻度情報を統計的に合成することで、高頻度、かつ、汎用的な漢語サ変動詞のリストを作成する。特定された漢語サ変動詞は教育的にも重要であり、言語学的にも重要な基礎資料となる。以下、5章から8章の分析はここで特定された語彙に基づいて行う。

5章では、漢語サ変動詞の活用的特性を調査する。漢語サ変動詞は一般に基本形で代表され、活用上の選好性は十分に解明されていない。そこで本章では、典型的な漢語サ変動詞が取り得る活用パターンを計量的に調査し、それぞれの活用上の選好性を明らかにする。

6章では、漢語サ変動詞の内部構成性を調査する。漢語サ変動詞の漢語部が取り得る統語パターンには様々なものがあるが、内部構成上の選好性は十分に解明されていない。そこで本章では、典型的な漢語サ変動詞の漢語部について、構成要素間の品詞結合、意味結合、これらを統合した品詞・意味結合の3つの観点から内部構成上の特性を明らかにする。

7章では、漢語サ変動詞の自他性を調査する。漢語サ変動詞は一般に自動詞専用型、他動詞専用型、自他両用型の3種類に分けられるが、既存の分類には矛盾やずれが見られ、また、いわゆる「両用型」の段階性も十分に解明されていない。そこで本章では、既存の研究の枠組みを拡張し、「Xさせる」という使役形や「Xされる」という受身形なども議論に含めた上で、典型的な漢語サ変動詞の自他パターンを明らかにする。

8章では、漢語サ変動詞の語彙的排他性を検討する。漢語サ変動詞(「Xする」と、同様の意味機能をもつ構文形(「Xをする」と)との関係は十分に解明されていない。そこで本章では、真に典型的な漢語サ変動詞は、漢語サ変動詞として多用されるのみならず、構文形を排除する語彙的排他性をもつものであるという前提のもと、典型的な漢語サ変動詞の語彙的排他性の程度を明らかにする。

第III部には、9章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識」、10章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用」と11章「コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発」が含まれる。

9章では、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞意識の解明を目指す。望ましい漢語サ変動詞のシステムを考案するには、学習者が実際にどのような意識を持っているかを正確に把握することが必要である。そこで本章では、漢語サ変動詞の基礎知識の理解度、応用知識の理解度、および漢語サ変動詞の指導に対する意識の3つの観点から、学習者の意識を解明する。

10章では、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用状況を解明する。望ましい指導を考えるうえで、学習者が現状において漢語サ変動詞をどこまで理解できているか、また、どのような問題があるかを知ることが不可欠である。そこで本章では、既存の学習者コーパスや筆者が独自に収集した中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用データに基づき、使用量、種類数、内容、及び誤用の観点から、学習者の漢語サ変動詞使用の実態を解明する。

11章では、コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発を試みる。以上で得られた知見を総合し、学習者に必要な漢語サ変動詞指導・学習システムを考案するため、コーパス調査で得られた知見を数値やグラフで要約する数値型学習シートと、それを実例で示す実例型学習シートを作成し、教育実験でそれぞれの効果を検証する。さらに、学習者の感想をふまえ、試行開発した学習シートの利点や改善点、および学習方法の良

さや欠点を検討する。

最後に、終章においては、本論文で行った調査・分析を章ごとに整理し、示唆と課題を示す。

論文審査の結果の要旨

氏名	李 楓		
論文題目	現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法 ―コーパス研究の日本語教育への応用―		
判定	合格 ・ 不合格		
論文チェックソフトによる確認	<input checked="" type="checkbox"/> 確認 <input type="checkbox"/> 未確認 理由：		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長	教授	柏木 治美
	委員	教授	石川慎一郎
	委員	統計数理研究所准教授	前田 忠彦
	委員		印
	委員		印
要 旨			
<p>学位申請者・李楓氏の論文「現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法―コーパス研究の日本語教育への応用―」は、日本語学習者にとって習得が困難であるとされる日本語の漢語サ変動詞を対象として、コーパス言語学の分析手法に基づく分析を行い、その用法を解明し、日本語教育への応用の可能性を論じたものである。世界の日本語学習者の大半を占める中国人日本語学習者から見た場合、漢語サ変動詞の漢語部の意味は、母語の知識からおおよその類推が可能である。しかし、その細かな振る舞いは母語の知識だけで説明できるものではなく、結果として、表面的な意味はわかっても、自然な運用ができないという問題が生じることとなる。そもそも、既存の文法は、漢語サ変動詞の文法的ふるまいについて必ずしも全体を明らかにしておらず、データの記述分析をふまえた用法の解明と教授システムの開発が広く待たれていた。</p> <p>李氏の研究は、中国人日本語学習者、とくに、中上級の学習者を対象とする指導を念頭に置きつつ、現代日本語における漢語サ変動詞の実質的な用法の解明と効果的な指導法の構築を目指したものである。氏の研究はコーパス言語学の分析手法を基盤とするものであるが、(1) 従来の研究でほとんど扱われていない漢語サ変動詞の統語的・用法的特性（典型性、活用選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性）に着目した点、(2) 母語話者コーパスと学習者コーパスを並行的に分析することで、現代日本語</p>			

における漢語サ変動詞の用法解明を行うだけでなく、学習者の漢語サ変動詞の使用に見られるずれや問題を母語話者モデルとの対比によって鮮やかに浮かび上がらせた点、(3) 漢語サ変動詞使用に関わる意識・学習実態アンケートを実施することで、コーパス分析の手法だけでは見落としがちな学習者の内面を明らかにした点に氏の独自性が認められる。氏の研究は、コーパス言語学的分析と、日本語教育学的考察をうまく融合させたものと言える。

本論文は、全体で384ページに及び、全12章構成をとっている。1～3章は、論文全体の第1部を構成し、まず、1章(序章)では、漢語サ変動詞の使用をめぐって学習者が抱える問題や、本論文の狙いを概観する。次に、2章「先行研究」では、本研究の理論的基盤をなす国語学・日本語学とコーパス言語学の各々について、過去の研究の概要を整理する。また、3章「リサーチデザイン」では、使用するデータ、本研究で分析対象とする漢語サ変動詞のタイプ、また、コーパスから得られた計量データの分析に使用する統計手法などについて概説を行う。

続く4～8章は論文全体の第2部とされ、コーパス調査を基盤とする漢語サ変動詞の特性分析がなされる。まず、4章「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」では、大規模な日本語コーパスから得られた頻度情報を統計的に加工することで、以後の調査の対象とする、高頻度かつ汎用的な漢語サ変動詞のリストを作成する。5章「漢語サ変動詞の活用上の選好性」では、漢語サ変動詞が取り得る活用パターンを計量的に調査し、それぞれの活用上の選好性を明らかにする。6章「漢語サ変動詞の内部構成性」では、構成要素間の品詞結合、意味結合、品詞=意味結合の3つの観点から内部構成上の特性を明らかにする。7章「漢語サ変動詞の自他性」では、漢語サ変動詞を自動詞専用型、他動詞専用型、自他両用型の3種類に大別した上で、自他の振る舞いに見られる特性の解明を行う。8章「漢語サ変動詞の語彙的排他性」では、漢語サ変動詞(「Xする」)と、同様の意味機能をもつ構文形(「Xをする」)を比較し、構文形を排除する排他性に着目して、漢語サ変動詞の形態的典型性の問題を論じる。

9～11章は論文全体の第3部とされ、日本語教育における漢語サ変動詞指導の実態解明と、コーパスから得られた知見を応用した新しい漢語サ変動詞教授法の提案がなされる。まず、9章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識」では、学習者アンケートにより、学習者の漢語サ変動詞の基礎知識の理解度、応用知識の理解度、および漢語サ変動詞の指導に対する意識の3つの観点が分析される。10章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用」では、既存の学習者コーパスと、独自に収集した作文データに基づき、漢語サ変動詞の使用量、種類数、内容、誤用が検討される。11章「コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発」では、コーパス分析で解明された新たな言語事実を教育現場に生かす方策を探るべく、コーパスからの知見数値やグラフで紹介する数値型学習シートと、実例で紹介する実例型学習シートの2種類を作成して教育実験を行い、いずれの学習シートの効果が高いか、学習シートに今後どのような改善が必要かを検討する。

最後に、12章(終章)では、各章で行った調査の内容と得られた結果を整理して示した上で、得られた知見を日本語学に応用していく方策の1つとして、既存の日本語辞書の記述の改善の方策を具体的に提案する。

以上で見てきたように、本論文は、従来の日本語学において十分な光が当てられていなかった漢語サ変動詞について、その統語的・用法的特性はもとより、習得や教授までを射程におさめた包括的記述を目指した労作であり、漢語サ変動詞の望ましい記述と教授について重要な知見を示した価値ある業績であると結論できる。よって、本審査委員会は、全員一致で、学位申請者である李楓氏に、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。

なお、申請者はこれまでに学外の学会で11回の研究発表を行い、学術論文等6編を発表している。また、語彙研究会より、業績審査を経て、研究助成金(公益信託田島毓堂語彙研究基金助成金)を獲得している。